



號三十八第  
 月八年九十和昭  
 行發日五十月一  
 錢五部一價定一  
 錢十六(共稅)分年  
 覺川藤 編人  
 國公谷比日區町總都京東  
 社信通盟同 所行發  
 員々會版二  
 (員々會版二)  
 (〇七)

### 人的資源は無盡藏

## 要は頭の切替へ

社長 古野伊之助

的物・的

サイパン島の失陥によつてわれわれ國民はいよいよ戦争が身近かに押迫つたことを痛感して来た。今まで南方の離れ島にたびたび皇軍將兵が玉碎し、壯烈な戦死を遂げて、祖國日本の防衛の人柱となつて斃れて行きつゝあつたにもかかはらず、遠く数千軒を隔たる日本本土においては、ややもするとまだ戦争を傍観したり、批評したりしてゐるかのやうな氣持が何處かに潜んでゐるといふ感みはなかつたであらうか。われわれの骨肉同胞が尊き犠牲を拂ひつゝ、祖國に本土防衛の任に當るわれわれのために時を稼いでくれたにもかかはらず、果してわれわれはその時を充分に活用したであらうか。サイパン島失陥を契機として、われわれが、戦争勃發以來二年九月月におわたるわれわれの心構へとその戦争努力に對して、猛反省を加へて奮然起ち上る時は今である。

靜かに考へれば、この大きな世界戦争をわれわれ日本國民のやうに悠長にやつて来た國民は、今日この大戦に参加してゐる交戦各國のうちには例を見ないと言つてもいい。しかしながら敵がいよいよ本土の支那に押迫つて来たといふこの客觀的情勢は、何をどうお

喋りをやつてゐても、何をどう屁理窟を並べてゐても、遮三無二急速な政府施策の變化進展を促さざるにはおかないのである。誰がどうぼんやりしてゐても、誰がどううっかりしてゐても、この客觀的情勢に直面して必ず上下一致の徹底的な體制の確立が齎されることは蓋し當然である。すなはち國の施策は兵員の充足に、食糧の確保に、兵器の増産に、この決戦の三焦點に向つて急激な施策が次ぎ次ぎと展開されて行くことは必然であると考へる。

兵員の充足 關しては今日この世界大戦を敢行しつゝある各國の何れの國に比するも、日本は、綿々たる餘裕を持つてゐるものはない。またかうやつてわれわれ同盟の同志が一堂に會しても、充分に戦線に立ち、銃剣を執つて戦ひ得る諸君がたくさんまだこの戦場に殘つて働いてゐる。各國の軍事動員の情勢を見ても、恐らく今日の日本は現實の軍事動員の倍以上の餘力を持つてゐる。盟邦ドイツはもろんのこと、ロシア、イギリス、アメリカ等がもう今日の資源の涸渇に喘じてゐることは、われわれの戦場を通じて報ずる外國電報によつてきはめて明確

に示されてゐる。この大戦もすでに末期的症狀を呈してゐる今日、兵員の充足において何れの國に比するも最も綿々たる餘裕を存してゐるものはわが日本である。

アメリカが一億三千万、イギリスが四千万、この人口を土臺として動員した兵員の大半は、歐洲において片付けられてしまふのである。敗残の米英軍が日本本土に來ようとも、フイリピン周辺に向かうとも、この一億の綿々たる兵員をもつて叩きつけられない理由は斷じてない。しかも日本の持つ今日の人的資源を振返つて見ると、日本は、滿洲四千万は完全なるわが日本の人的資源である。南方占領地域一億數千萬は、これまたわれら一億とともにつく人の資源である。加ふるに最近の支那大陸における作戦によつて支那全人口の四分の三はわが日本民族とともに共同戦線に立つに至つたのである。

アメリカ、イギリスが貧弱なる人的資源をもつて、しかも歐洲において大半消耗せる敗残の兵力をもつて、東亞に何事を企てようともこの大の資源の前には何事をなし得やうぞ。

食糧確保 の問題にしても今まで餘りにも悠長なる戦争を纏けて来た結果、今日この瞬間においてなほ食糧問題を云々しなければならぬやうな事態にあるが、これも一億總掛りで解決するのだといふ決意をした途端に、たちどころに、解決案は生れて來るのである。戦争は兵隊が、食糧は百姓が、兵器は職工がといふ觀念がそもそも間違つてゐるのである。われわれかうやつて文筆を執る連中でも食糧の増産に寄與しよう。兵隊も、會社員も、學生も、全部食糧増産に一定の時間を割く態勢がつきさへすれば問題はないのである。のみならず、今まで平時時代そのまに、毎日家庭では朝晩それぞれ米を炊いて、平時のままの食生活を續けて來てゐる。こんな悠長なことで民族の生存を決定するこの大戦争がどうして勝抜けるであらうか。この解決はきはめて簡單である。粉食、すなはちパン食の利用をわれわれの日常の生活の中に採入れさへすれば、無限の食糧資源が所在に發見されるのである。

かうしたこともう遠からず政府の施策として當然現はれて來ると考へる。食糧問題を、過去の平時そのままに放任し、燃料不足だといひながら戦争前の姿で一軒一軒が炊事をやつて、主婦が朝から晩まで買出しに没頭してゐるやうなせうたく千萬な生活を續けながら、どうしてこの戦争が戦ひ抜けるであらうか。考へて見れば反省することばかりである。

日本本土空襲必至といひながらわれわれの家庭で朝晩飯を炊いてのんびり生活をしようなどといふふざけた物の考へ方がいつたい成立するであらうか。當然この食糧問題の根本の方向につけばならぬ。ちよつと頭の切替へをしなへすれば、無盡藏の食糧資源が、海に、山に、野に、發見されるのである。これは單なる空論ではなくわれわれの戦時調査室において着々その調査を進めて、具體的な施策を提示しようと思つてゐる。食糧問題は一抹の不安もないのである。問題はただ一つ、頭の切替

へ、これだけである。これを思へば、實に仕合せな國土にわれわれは生れて來たものと思ふ。

兵器の増産 關しては、われわれは具々に大小の軍需生産の實情を、時の許す限り情勢を見て廻つたが、人的資源はまだごろごろしてゐる。當局者に言はせると、人的資源はいよいよ缺乏して來たといふ。しかしながら問題は機の上で數へた頭數が何處に配置されたといふことではなく、配置された人間が果して眞剣に働いてゐるか、あまいか、働かせてゐるか、働かせてゐないか、人間一人前の力を二人前、三人前に出してゐるかでないかである。軍需生産工場の内容については根本的な検討が當然行はるべきだと思ふ。さうすれば、政府當局者がまだ平時の意識で、指導するとか、監督とかいつて作文を作つて、これを軍需工場に渡し、それでよいなどとさめてゐるのんきな考へは當然消滅されるに違ひない。政府も民間會社も、生産會社も、一體となつて、軍需、食糧の衝にあたる當局者自身が、生産責任者の立場に立つて、死にもの狂ひの軍需生産にぶつかる時はもう目の前に迫つて來てゐる。日本本土空襲の下にこの任務を遂行して行くことは、ほんたうに生き甲斐のある生活である。

今日の大戦を闘つてゐる各國の首都にして、殆ど叩きつぶされてゐない國は、アメリカを除いては日本だけである。ベルリン、ロンドン、モスクワ等とれを數へて見ても、何れもその首都は敵軍のために殆ど叩き壊された姿のままに勇戦奮闘を續けてゐるのである。日本もどうやらこれから世界各國並みの段階に入つて、さうしてこの決戦を闘ひ抜かうといふのである。

世間並みのことをやりさへすれば、この戦争に充分勝ち抜けるのである。綿々たる餘裕は、どの方面からでもしつかり掘み得るのである。

軍需生産に關してゐる人々は、人手が不足だ、資材が足りない、と言つてゐるが、これみな平時意識に基因するものである。資材が不足ならば人間が作ればよいのである。物があつても人間がなければ生れて來ないが、人間があり餘つて物が出來ない理由は斷じてないのである。石炭が足りなければ石炭を掘ればよい、鐵がなければ鐵を造ればよいのである。その原動力である人的資源はあり餘る餘力を持つてゐる。日本民族がこの戦争に何で物的戦力を恐れることがあらうか。

新聞記者の常套文句に「敵は物量を持つて——」といふ。物量は人間の働きによつて造られるところのものである。問題はただ、その氣魄を、その意氣を、その努力を發揮することによつてのみ、無限の物的戦力が生れて來るのである。われわれはこの點を日本全國民に徹底浸透させねばならぬと思ふ。ややもすると、アメリカの謀略にでもかかつたやうに、物的戦力たる鐵がやれ、石炭がやれ、アルミニウムがやれ、と戯言を言ふ。さういふ指導者どもを一人一人説得して、物的戦力は人的戦力によつて無限に生み出されるものであるといふことを教へなければならぬ。

かくの如くにしてわれわれは、いよいよ日米決戦を日本本土の周邊において敢行すべき秋に直面したのである。われわれ同盟の同志は、この三つの戦争努力のうち最後の部類に屬すべき思想戦の軍

(第三面(續))

# 大嶽、脇本、林君の 合同社葬執行

南方戦線に報道班員として活躍  
中昭和十八年初頭名譽の戦死を遂  
げて報道戦の華と散った社會部大  
嶽玄翁、聯絡局企書部脇本誠一、  
電務部林清君三柱の合同社葬は、  
島山常務理事葬儀委員長、高次日  
枝神社囑託齋主、古野社長祭主と  
なり、八月九日午前十時、本  
社別館二階葬場において厳修され  
た。故大嶽君未亡人タニ子さん、  
脇本君母室このさん、林君嚴父清  
太郎氏を始め各遺族、緒方情報局  
總裁(代理)他關係者、古野社長  
以下各幹部、故人既知社員等多數  
參列、祭壇には畏くも 天皇 皇  
后兩陛下より御下賜の祭料、幣  
帛をはじめ、米内海軍大臣、及川  
軍令部總長、多田南方政務部長、  
陸海軍報道部長、情報局總裁、滿  
洲國大使館、全國各新聞通信社、  
電通、日映、映配、放送協會等か  
ら贈られた幟、花輪が故人の遺體  
を偲ばせるうち、式は齋主高次日  
枝神社囑託の修成をもつて始めら  
れ、伶人奏樂裡に獻饌、一同起立  
裡に齋主誦詞、祭主古野社長の祭  
文奏上を終り、次いで來賓緒方情  
報局總裁、南方政務部長、陸海軍  
報道部長(各代理)の弔辭朗讀、  
齋主、祭主、各遺族、來賓、參列  
諸員の玉串奉奠が行はれ、再び奏  
樂裡に撤饌、十一時四十分葬儀を  
終り引續き告別式に移り午後零時  
すぎ滞りなく終了した。

なほ大嶽君の英霊は十一日郷里  
愛知縣寶飯郡一宮村において村葬  
執行の後郷里の墓地に埋葬され、  
脇本、林君の遺骨もそれぞれ郷里  
に還り公葬が行はれた。

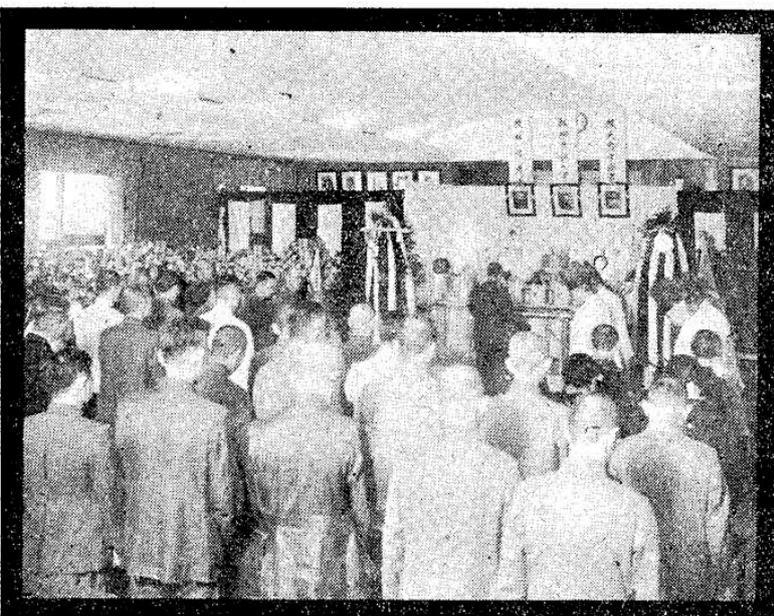
## 南方總社、華中總局 でも 追悼祈念

また合同社葬の行はれた九日、  
南方總社では福岡總社長以下全員  
總社内にしつらへられた祭壇前に  
集合して故人の冥福を祈り、華中  
總局でも全員編輯室に參集して帆  
足總局長司祭の下に嚴かな追悼の  
默禱が行はれた。

弔問者は次の如くである(順不  
同、敬稱略)

- 南方政務部長海軍中將多田武雄代
- 理柴田中尉、大和印刷合資會社社
- 長長濱實藏、圓谷文雄、熊本日日
- 新聞東京支局長永嶺信恒、同社長
- 伊豆富人、日映常務理事折橋慶治、
- 情報官宇田武次、情報局總裁緒方
- 竹虎、同次長三好重夫、海軍報道
- 部濱田中佐、京城日報東京支社長
- 飯澤幸治、陸軍報道部長松村秀逸
- 大佐、陸軍報道部長廣石中佐、日本
- 新聞會總務部長前田潔、東京新聞
- 編輯局長山根眞治郎、朝日新聞社
- 編輯局長山根眞治郎、朝日新聞社
- 長村山長、同秘書課長北村精一
- 郎、電通監査役石井衛太、作家漢
- 邦三、日映時事映畫製作部長土屋
- 齊、北海道新聞の湯、放送協會常
- 務理事矢部謙次郎、京都新聞東京
- 支局長小林俊司、新潟日報東京支
- 局長川崎新吉、合同新聞社長橋本
- 富三郎、同副社長杉山榮、同東京支
- 社長小山政夫、愛媛新聞東京支社
- 長山浦利喜衛、朝日新聞編輯副總
- 長北野吉内、關門日報支社長代理
- 前田清一、福島民報三瓶繁夫、東
- 奥日報東京支局長藤田義一、放送
- 協會會長下村宏、毎日新聞編輯主

- 幹阿部賢一、神戸新聞東京支社長
- 光田顯司、新潟日報東京通信部長
- 松井敬、鹿兒島日報東京支社長
- 佐二、電通社長光永貞三、電通安
- 藤彪雄、同常務取締役木村哲造、
- 讀賣編輯局長中溝義親、同副社長
- 高橋雄豹、信濃毎日新聞社長小坂
- 武雄、同吉田久次、西日本新聞社
- 長永江眞郷、同星野力、臺灣新聞
- 東京通信部長長松頼廣、讀賣社長
- 近藤藤、同主筆伊藤正徳、放送局



- 國新聞東京支社長飛鳥江亮智、電
- 通事務取締役若子龍太郎、同理事
- 本田中、讀賣總務局長稻葉輪一、
- 日映文書主任峯虎十、同總務部長
- 池田永造、同海外局長星野辰男、
- 日本新聞配給會理事長佐藤新衛、
- 日本産業經濟新聞社長村上幸平、
- 中部日本社長大島 郎、同副社長
- 小山龍三、同理事長三浦修治、同
- 近藤藤、同主筆伊藤正徳、放送局

## 祭文

謹んで故海軍軍醫社員大嶽玄翁、  
脇本誠一、林清三君の英霊に告ぐ。  
大嶽玄翁君

君は大正五年一月愛知縣一宮に生  
れ、昭和十三年三月上智大學新聞  
科を卒業直ちに滿洲國通信社に入  
り我社に出向、同盟記者として非  
常時日本の報道戦線に參加せり、  
君、天資豁達明朗、周囲の愛敬を  
一身に蒐め、自らの志すところ、  
諸友の期待するところ、正に有爲  
の大操縦者たるべく、香港作戦に  
參加せるを始めとし、南方各地に  
轉戦、大東亞建設に粉骨碎身の努  
力を傾け、十八年一月アンボン支  
局開設準備のため奔走中敵襲を蒙  
り、最後まで僚友の安否を案じつ  
つ惜しくも南海の濤に散華せり  
脇本誠一君  
君は大正九年紀元の住館福井市に  
生れ、昭和十四年三月東京高等無  
線電信學校を卒業、十四年三月我  
社に入り間もなく出でて北支へ轉  
じ、十七年十二月更に進んでスラ  
バヤ支局に勤務、屢々從軍して偉  
功を樹つ、資性稀に見る力學篤行  
の人、恭儉己を持し、親に奉ずる  
こと極めて厚し、其の志操の堅固  
なる、技術の優秀なる、本社に、  
北支に、行くとして可ならざるな  
く、常に衆望を集め、南方に轉じ  
てはローマ字放送を直ちに漢字に  
受け、大いに上司の信頼を、現地  
人同僚の尊信と共に得たり  
次いでマカッサル支局開設の命を  
受くるや、君は主として資材獲得  
の任に就き、各地を飛んで殆ど寢  
食を忘るが如くせり  
然るに、其の途未だ半ばにして敵  
襲に遭れ、護國の若き花と散れり  
林清君  
君は我が同盟講習所の出身、大正  
十三年一月二日、大阪府布施市に  
生れ、講習所に學びつつ中野高等  
無線電信學校を卒業、十七年八月  
入社、電務部に勤務、同年十二月  
選ばれてマカッサル支社に轉じ、  
弱冠よく先輩と伍して報道の任に  
精進す  
溫純の性、純眞の質、文學を愛し  
音楽に親しみ、孝心厚く、常に同  
僚に對し母堂の事を語りて自ら喜  
び、荒み勝ちなる前線支局に一抹  
の家庭的感覺を添へたり  
然るに越へて十八年一月アンボン  
支局開設の命を蒙り勇躍してマカ  
ッサルを出發、大嶽記者と運命を  
共にす  
卿等三名等しく南海、酷熱の地に  
報道報國の社を體し、勞苦を克  
服して盡さざるなく、遂に死を以  
つて之を具現す  
卿等の死は之永生なり、卿等の肉  
體は其の途に殘ると雖も續く同志  
の精進に依り其の志すところ皆完  
く、大東亞の通信網即ち成る、是  
れ卿等の魂魂なほ我等の戦線に留  
りて同志を鼓舞し、聖戰の完遂を  
期しあるを信せんとなす、今や敵機  
の我本土を侵すこと再三、其機動  
部隊は迫りて小笠原の近海に在り  
一億の怒り此處に凝つて熱火と化  
し、襲ひ來る醜態を蹴返し、二千  
六百年けがれ無き神州を護り抜か  
んとするの秋、奇しくも卿等の英  
靈を迎ふ、英靈勇魂、祖國の急に  
參せんとして馳せ歸りたるものか  
英靈よ、願はくば安んぜられよ、  
同志五千、一億同胞に先んじて、  
卿等の志を繼ぎ、心身を捧げて祖  
國の護りを完せんことを誓ふ  
本日茲に社葬を執行せんとし、些  
か増を設け、衷心を披瀝して英靈  
を慰む、唯式を略し、用を節し、  
禮を缺くの貌ありと雖も、之即ち  
決戦下、卿等の英靈に應へんとす  
る吾等の飾りなき志なり  
英靈、希は享けよ。  
昭和十九年八月九日  
社団法人 同盟通信社  
社長 古野伊之助

# 大阪支社長更迭

## 後任 稻本經濟局次長

蒙自治政府ではさきに辭職した蒙疆新聞社理事長細野繁勝氏の後任理事長の人選推挙方を豫て古野社長に依頼中であつたが、國內、大陸、海外事情に通暁し、業務關係にも練熟せる新聞人と、古野社長の手許において慎重人選の結果大阪支社長結束武二郎氏を推挙することに決定、蒙疆自治政府に紹介中のところ快諾を得たので、結束氏は蒙疆新聞社理事長に正式就任、八月十三日赴任の途に就いた。

### 結束氏は福岡元支社長の南方

(第一面より續く)  
需工場の職工である。不肖古野はこの需工場の工場長をもつて自ら任じてゐる。諸君とともに粉骨碎身、この需工場を預つて、死にもの狂ひに敵の空襲下に闘ひ抜かうとしてゐる。

今日日本本土に生存する日本國民は悉く戰場に立つた戦友である。今日われら同志は戰場で斃れた三人の戦友を迎へて、明日は社葬をもつてこれを送らうとしてゐる。かういつて語つてゐるお互ひが顔を見合せてゐるうちに、いよいよこの日本本土が戰場となつて來れば、何日何處で誰が敵弾に撃れないとも限らぬ。しかしながらこの前古未曾有の世界の大變局にあつて、祖國防衛のために斃れて行くのは、皇國臣民として無上の光榮であり、無限の感激である。かくしてわれわれは最後の一人となるまで闘ひ抜く決意を固めた時に、日本本土の防衛は磐石の基礎の上に立つのである。

轉出の後を享けて支社長就任以來僅か一年半であるが、大阪支社を預つてせつかく纏りつつあつたところへ蒙疆側の是か非でもといふ觀察により、多大の功績を残して今回の轉出となつたもの。氏には將に銃剣を執つて祖國の急に赴かんとしてゐる三人の令息があるが、若い令息達に負けぬ元氣で一足お先きに勇躍大陸の最前線に赴つこととなつたわけである。

### 結束支社長の蒙疆新聞轉出の後任には經濟局長稻本國男氏が据

われわれ同盟を中心とする五千五百の戦友は、直面してゐる思想戰の需工場の職工として粉骨碎身、國のために闘ひ抜かう。一朝お召しに與つた場合には、何時でも銃剣を執つて起ち得る姿勢を整へ、微力ながら食糧増産の國家の要請に副ひ得る努力を土に汗して實現しつつ、われわれの職域に精進しよう。

最後に、最近私の或る友人の子息で、需工場に働いてゐる學徒が、その體驗と心境をその父親に書き送つた手紙の一句をここに諸君に傳へて、今日のお話を終りたいと思ふ。田舎の師範學校に入つて學校の先生にならうと思つて勉強してゐた年若い青年が、名古屋のある需工場に勤務奉仕してゐる、その心境を語つた手紙の一句である。長い手紙であるが、その一言半句、すべて子供の親に對する眞情を物語つたものである。その中の一句だけを拾つて讀む。

『……召された自分だ、思ふ存分

ることとなり、既に去る七月末社長より大阪支社において發表披露が行はれ、八月十三日赴任した。稻本新支社長は元來が大阪の同盟で育つた新聞人で、大阪は古巢である。本社、上海、ニューヨークと各地において一應世界の情勢をしつかり纏んで、第一次の交換船で歸國、以來經濟局長の椅子にあるが、氏の今日の識見、手腕の基礎は大阪支社において築かれたもので、大阪の外經が大阪の對外經濟關係の中心であつた時代にその中心となつてこれに當つてゐたものである。寧ろ「大阪の同盟人」として親しまれる氏の大坂支社長は、かつかうの適役として頗る期待される。

やりぬいてみます。學窓から工場へ、工場から軍隊へ、それから九段の杜、これが私の歩む最後の道であり、人生であります。國家の要請に己れを盡してゆく、所在に生きてゆく私の覺悟です。事から事へ自己を盡して行きます。しかし戦局は……、サイパンを想ひ、私は今南に飛ばんことを念ずる。しかしそれはならない。せめて補給は、私達が渾身の努力でやり抜く糧です」と書いてある。學窓から工場へ、工場から軍隊へ、それから九段の杜、これが私の歩む最後の道であり、人生であると結論してゐる。これは單なる身の廻りに現れた一つの事例に過ぎないが、今日全國津々浦々何百萬を數へる祖國日本の若者はこの通りの氣持で、それぞれの立場で、國のために身を忘れ、家を忘れて闘つてゐる。この心境が一億國民一人一人の胸中に刻み込まれた時、兵員の増強に、食糧の確保に、軍需の飛躍的増強に何の困難もあらう。

(八月八日大詔奉戴日訓示)

### 専用線

岡山 岡山支局では今回天照皇大神を支局内に奉祀することとなり、七月二十三日岡山神社司祭の司祭で厳肅な鎮座祭を舉行した。



### 支那事變從軍章下賜

支那事變に從軍せる左記本社關係四十七名に對し今回支那事變從軍記章、賜品及び辭令書が下賜せられ、七月十九日船木人事部長が陸軍省に出頭して代理受領した。

賜品二號 猪野芳雄、木村孝一、大西保太郎、近藤精教、伊藤逸夫、佐々木嘉一、松尾次男、野間正治、内山林之助、今井祐一、松田常雄、渡邊謙、賜品三號 村山謙、齋藤玄彦、淺井達三、井關實、殿木圭一、須藤宣之助、齋藤桂助、松村俊夫、中屋健次、久我豐雄、岡村二一、松原一夫、森山末松、阿部操一、岩井和夫、井關納、芦部茂雄、小林春雄、岡崎龜男、畑野基、松井善四郎、岡崎龜男、鹽塚俊三、川崎正雄、山本寺、山部憲太郎、横山浩、高橋定一、寺本正俊、福代金男、横山大二郎、田島義夫、吉井四郎、大塚立見、福成秋雄。



### 北華

サイパン島全員戦死の悲報に接した北華北總局では一億總武裝はまづ一頭の切替へ」からと、八月八日の大詔奉戴日を期して全員残らず九列りにしたが、來燕中の佐々木中華總社長もこれに大賛成、まづ自ら「頭の切替」をして範を示し、鈴木總局長の頭も綺麗サツバリ

### 二千六百年 記念章下賜

本社關係左記十二名に對し今回紀元二千六百年祝典記念章が下賜せられ、このほど通信院業務局長より送付通知があつた。

松本重治、鷹野壽、大平安孝、田村源治、岡村二一、山口巖、萩野伊八、高尾辰馬、板垣武男、近藤雨梨、川添邦彦、松宮覺次。

### 動靜

社長西下 古野社長は大阪支社長更迭について關係方面へ披露照介のため七月三十日午前東京發西下、三十一日正午より大阪俱樂部において河原田大府知事、坂間大阪市長、朝日、毎日兩社長を招いて懇談を遂げ、同夜は大阪支社幹部ならびに近畿各支社長を大阪支社に集めて支社長更迭に關する事情説明と激勵訓示を與へ、次に翌八月一日正午より關西經濟界有力者と懇談して二日離阪、伊勢神宮に参拜し、さらに津、名古屋を訪問して三日中部日本紙幹部と懇談を遂げた後、四日午前歸社した。

蒙疆聯絡局長南方より歸還 南方各地における通信施設の實況ならびに一般情勢觀察のため去る四月十七日東京出發、臺灣、比島、ジャワ、馬來、ビルマ、臺灣、各地を訪問中であつた蒙疆聯絡局長は三月半に亘る觀察、前線報道戰士慰問を終へて八月一日歸京した。

塚本總務局長西下 塚本總務局長は古野社長に隨行して七月三十一日午前東京發西下、京都支局長と事務打合せならびに奈良、和歌山兩支局の査察を行つて八月三日歸社した。

稻本經濟局長 蒙疆に轉出の結束大阪支社長の後任としてその披露および事務引継ぎのため社長に隨行七月三十日東京發西下、八月七日一旦歸京し、十三日正式赴任した。

結束大阪支社長 別項の如く今回蒙疆新聞社理事長に就任、赴任準備および挨拶のため八月八日上京、十三日東京發赴任の途に就いた。

樋口東亞部次長 結束蒙疆新聞社理事長の就任と同時に、樋口次長も同社入社と決定、八月十七日赴任。

大展企画部次長 今回出向社員として放送局海外局編成部長に就任した。

萩原忠三氏 三社聯盟およびD B特派員として南方方面出張中前線において敵機襲撃を受け負傷、約五ヶ月に亘り療養中であつたがこの程全快した。

緒方顧問 さきに小磯内閣成立に際し國務大臣兼情報局長として入閣し、今回また翼賛會副總裁に就任した。

# 人事異動

**總務局勤務參事** 彦坂 竹男  
**戰時調査室勤務ヲ命ス**(五・二〇)  
**經濟局內經部商** 森 莊三  
**通主任副參事**  
**經濟局業務部通主任ヲ命ス**  
**編輯局勤務參事** 秋山 慶幸  
**經濟局勤務ヲ命ス**  
**經濟局勤務副參事** 村木 政吉  
**編輯局勤務ヲ命ス**(六・各通)  
**南方總社寫眞部長ヲ命ス**(七・一)  
**眞部長心得** 知久 義雄  
**華中總局總務** 伊藤 大二  
**部經理主任**  
**總務局勤務ヲ命ス**(七・二七)  
**總務局人事** 船木 重光  
**部長參事**  
**總務局經理部長兼務ヲ命ス**  
**總務局勤務參事** 瀨川伊和男  
**總務局庶務文書主任ヲ命ス**  
**總務局勤務副參事** 綾野 政治  
**總務局人事部長兼保險主任ヲ命ス**  
**總務局經理** 上村 藤吉  
**部長參事**  
**總務局經理部長ヲ解ク、總務局勤務ヲ命ス**  
**總務局庶務部** 植松 尙男  
**文書主任參事**  
**總務局庶務部文書主任ヲ解ク、總務局勤務ヲ命ス**(七・二九各通)  
**編輯局整理部** 森 元治郎  
**次長副參事**  
**聯絡局航空部長ヲ命ス**  
**聯絡局長參事** 住谷 金吉  
**部長參事**  
**中華總社次長ヲ命ス**  
**華中總局次長** 帆足 升  
**華中總局長ヲ命ス**  
**華南總局寫眞部長心得** 高崎 修  
**華南總局寫眞部長ヲ命ス**

中華總社長兼華中總局長參事	佐々木健兒
華中總局長勤務ヲ解ク(七・三二各通)	(以下頭寄勤務部、括弧内舊任地、數字は發令日附)
編輯	植村騰千代(戰調) 六二五
香港	中村 義幸(華南) 六二二
海口	石田 敏夫(同) 六二七
橫濱	高尾まさ子(總務) 六二八
編輯	大友 キヨ(同) 七一
同	野中 洋子(同) 七一
同	小林 津子(同) 七一
同	小泉 鈴子(同) 七一
同	菊地 絹子(同) 七一
同	小田川わか(同) 七一
同	岸田 繁(ツサ) 七一
同	エルマ
同	シム
漢口	清川 儀一(中華) 七一
聯絡	山田 實(南方) 七三
同	迎川 強(セブ) 七三
同	小路 春美(編輯) 七三
大阪	佐藤 一雄(臺北) 七五
經濟	東條 良(中華) 七二
同	三須 昌子(華中) 七二
同	稲石 明(山口) 七二
同	佐々木 隆康(經濟) 七三
同	小川 博(華北) 七三
同	牧野 武(漢口) 七三
同	石田 武(漢口) 七三
同	清澤 止次(門司) 七五
同	岡崎美枝子(編輯) 七二
同	德江清太郎(西貢) 七二
同	鶴田 左門(釜山) 七二
同	峯間 信大(編輯) 七二
同	笠原 義榮(同) 七二
同	圓山健二郎(蘭貢) 七二
同	今井 幸彦(同) 七二
同	東條 長生(編輯) 七二
同	福原 信義(廣島) 八一
同	戶田大八郎(漢口) 八一
同	大高 義孝(同) 八一
同	諸川 英二(太原) 八一
同	青松 能夏(保定) 八一
同	長尾庸四郎(海外) 八一

**以下社員ヲ命ス**  
 (滿洲國通信社勤務) 柴田勝春、(ジヤカルタ) 田邊榮造、(經濟) 高島金正、(名古屋) 藤村清治、(水戸) 佐久間直、(千葉) 武田三彌、(長野) 依田義元、(臺中) 小中正世、(高雄) 大橋今朝男、(成興) 山口公良、(中華) 國井年春、(華北) 赤尾多、(太原) 諸川英二、(華中) 末吉光義、(ジャカルタ) 大橋信次郎、(マカッサル) 安永勝太郎、(西貢) 木村壽榮吉、(ベナン) 高橋英美、(メダン) 堀野外喜雄、(盤谷) 平山庫四郎、(レガスピ) 林田萬徳、(バンドン) 田鹿鐵五郎、(メナド) 水野秀天(七二各通)  
**以下準社員ヲ命ス**  
 (總務) 藤原富美子、二宮ノブ、國府田芳子、(編輯) 三木陽子、大河内昌子、推野敦子、推野愛子、(海外) 野村登志江、(經濟) 松岡トミ、中島愛子、(聯絡) 松田一夫、山田千代子、河端末吉、(大阪) 松山富子、青木裕子、山内光子、田中津ね子、安永美代子、網孝子、猿田折枝、石川つね、山内彌生、三杉律子、中村文江、古門富美、河合ハツエ、千賀富江、水田三郎、大岡秀明、伊藤利雄、逸見保子、倉光朝子、吉野光子、(名古屋) 高木周一、櫻井善男、(甲府) 石原たま子、(浦和) 大野一枝、(長野) 茂手木勝代、(福井) 東郷八、(岡山) 安藤壽、吉村勝一、(高知) 渡邊登美恵、(平壤) 金城勇太郎、(臺北) 渡部芳子、島居京子、唐玉銓、(中華) 高柳宅三、(華北) 梶原俊夫、(青島) 中原重雄、(開封) 林茂、(海州) 佐々木祐次、(華中) 篠崎滿、植田君子、大川三喜子、(蘇州) 小柳敏之、(徐州) 小川茂、(華南) 竹内代二、(南方) 保立文江、小松原松太郎、(マニラ) 高野忠一、(西貢) 高塚一郎、長根一雄、(蘭貢) 澤井留一、(プキチンギ) 田中泰一、(河内) 酒卷勝、(パリツク) 内

田啓明、(タイピン) 増田孝彦、(パシフィック) 日置正泰、石田二一、(スマラン) 石井壽作、道川晴波、(スラバヤ) 笹江卯一、(ダバオ) 大城丈法(七二各通)  
**マニラ支局事務嘱託** 菅野忠之助(七二)  
**聯絡局事務嘱託** 井口賢太郎(七二)  
**依願解職** 小關藤一郎(編輯) 六一、木村嘉長(經濟) 六一、吉原邦枝(大津) 六一、石出茂(京城) 三浦三千代(經濟)、三津村政榮(金澤) 六一各通、町田正三(靜岡)、藤崎カツ子(福岡)、宇都宮要(華中) 六一各通、定盛靜子(橫濱)、前田英子(神戸) 六一各通、廣澤綾子(大阪)、琴山明(華北) 六一各通、足立克己(經濟) 六一、平澤直之(編輯) 六一、長野春江(總務)、若竹太(海外)、永倉秀子(靜岡)、稻道則(大阪)、石山一夫(平壤)、金鎮琪、殿太(京城)、西川實(漢口)、久野正夫(華南)、小林義雄(ジャカルタ) 六一各通、寺井克子(名古屋) 七五、林潤庚(高雄) 七八、春山郷子(大阪)、菅谷トヨ(天津) 七〇各通、竹下うめ子(總務)、遠藤正三(聯絡) 七一各通、關口政男(編輯) 七一、醍醐すゑ子(總務)、川井照子(編輯)、我藤文江(經濟) 七二各通、中宮博(札幌) 七七、多田ヨシ子(大阪) 七八、樋口元之助(臺中) 七〇、柳澤文雄(聯絡) 七三、國井敏雄(海外) 七二、進藤余四男(蘭貢) 七三)  
**依願解職** 島田忠治(バンドン)、小島敬三郎(編輯) 六一各通、井山博次郎(橫濱)、池田菊代(華南) 七二各通、阿久津久次(戰調) 七三)  
**休職期間満了退社** 吉田雅子、池口光治(六一各通)、山田壽榮男(七一)

**△結婚** 富田正章、中村喜八郎(編輯)  
**△應召・入營** 秋山泰造、宮村秀雄(總務)、黒川四郎、齋藤金四郎、笹原貞夫、小黒大州、藤田正二、林大六、關口榮三、淺山進一、北雄七、吉野實、近藤正彦、妹尾忠男(編輯)、坂東安正、鈴木健、中村信(經濟)、大村徳太郎、津野菊雄、中井延次郎、東海林健、徳山辰行、山田實(聯絡)、長澤憲二、牧克武(技研)、小山幸照(長野)、古澤孝(南方)  
**△出産** 佐々木公庸(總務)、丸山信也、岡田博、嘉納慶方、石川守泰、新井正義(編輯)、大塚勇吉(經濟)、要保太郎(聯絡)、西村幸雄(京都)、要向種六、永由武秋(神戸)、島田喜一(金澤)、上杉憲治(熊本)、田島美夫(天津)、徳永康(東京)、横山大治郎(華北)  
**△見舞** 會田國子、小宮頼平(總務)、渡邊正二、石田平八郎、大西保太郎、小島美美子、箕浦信太郎、豊田清、南郷清隆、拓殖孝八、中村喜八郎(編輯)、門田浩、三浦良知、武田文男(經濟)、三浦嘉平(聯絡)、山崎誠(戰調)、宮井幸子(京都)、加賀壽子、河瀬守二(金澤)、寺尾順佑(華北)、宮瀬廣(聯絡)以上本人病氣

**△弔慰** 村上達(編輯)、川上光子(經濟)、高田豊子(神戸)以上本人死亡、田島次郎(聯絡)、吉谷清次(金澤)以上父死亡、要保太郎(聯絡)、熊瀨彦二(編輯)以上母死亡、平野宗義(編輯)妹死亡  
**△退社** 長野春江、布浦富美子(總務)、植木登志子、西原行火、木村嘉長、三浦三千代(經濟)、細田要(神戸)、江藤隆夫(廣島)、佐藤絹子(旭川)

## 互助會報告

(六月)

## 通風

合計 八十三件  
 △言はんと欲して言ひ得ざる不満、書かんとし、書き得ざる報道上の機密、軍道人の悩み、軍事外交上の機密